

はばたく紙芝居 平和の力 —2019年をふりかえって—

野坂悦子 (紙芝居文化の会海外統括委員、翻訳家・作家)

創立から今年で十九年になる紙芝居文化の会 (The International Kamishibai Association of Japan, 略称 IKAJA)。昨年は「はばたく紙芝居 平和の光」というテーマのもとに、三十数名の運営委員が全国各地で、また講座に集まって、紙芝居の魅力を伝えてきました。

個人・団体をあわせて会員数は、国内に六〇五、海外に四〇四、合計一〇〇九になりました。会員数が千名の大台を超えたのは創立以来初めてです。また新しくアフガニスタン、リトアニア、ネパール、イラン、スウェーデンに住む方からの申し込みがあり、日本を含めて世界五十の国と地域に会員が広がりました。

三通信と会報、部会

国内会員に向けては、二月と八月に三通信を、六月と十二月に会報を発行しています。三通信は最近の会の活動をタイムリーに伝えるもの。会報(定価五百円)は半年間のまとめとして、講座報告や特集記事をお届けしています。二〇一九年十二月に出した会報三十四号は「平和への願いと紙芝居」がテーマです。アメリカとドイツの会員が紙芝居と平和について書いた

エッセイや、平和紙芝居部会で活動する運営委員のメンバーが、五つの作品を通して平和への願いをまとめた文章などが収められています。紙芝居文化の会には、運営委員が構成する部会が三つあり、その一つが平和紙芝居部会です。またおすすめ紙芝居検討部会、理論研究部会も定期的に集まりをもって、学びを深めています。

海外会員には、デジタル版の Kamishibai Newsletter vol.15 を九月に発行しました。

連続講座

四月から始まる二つの連続講座は、「少人数」で行う紙芝居文化の会の活動の柱です。どちらも全六回、東京・巣鴨の童心社内の KAMISHIBAI HALL で行っています。

演じ方を深める連続講座「あなたも輝く演じ手に」では、昨年、二回の実演指導のうち、一回をブックハウスカフェ(神保町にある書店)で行うという、初めての試みを取り入れました。おかげで講座はすぐ定員に！ 実演希望者十四名+聴講のみ希望者七名の参加がありました。九月十四日の発表会には、年齢も立場もさまざまな観客を前に、演じる楽しさと難しさの両方

を分かち合いました。

創作の連続講座「あなただけの作品を創りましょう！」の受講者は九名。酒井京子さん(紙芝居文化の会代表・童心社社長)と目下部茂子さん(広報統括委員)が主な講師を務めました。半年間、宮崎県から通われた方もあり、最終回では力作が発表されました。

また二〇一八年十二月〜一九年二月にかけて、まねきねこの会のメンバーが中心となり、宮崎県都市で開催した演じ方の連続講座(全三回)には、地元のを結集してのべ百五十人以上の方が参加、大成功だったそうです。

なお二〇二〇年の連続講座は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を避けるため、開講を来年まで延期しました。

定期講座

昨年は、九州でもう一つ、紙芝居文化の会が、現地実行委員とともに主催する定期講座がありました。福岡県春日市で六月三十日(日)に開催した「紙芝居講座九州大会」が、それです。福岡・長崎・大分・熊本・宮崎・鹿児島有志による実行委員会(委員長は運営委員の柳田多

早乙女勝元さんのお話

十一月には、東京で総会&紙芝居講座を開きました。今年から吉祥寺から、神田神保町に場を移し、出版クラブビルを新会場に決めました。十六日(土)〜十七日(日)で、のべ二二〇名(一日目一六名、二日目一〇四名)の参加者が集まりました。

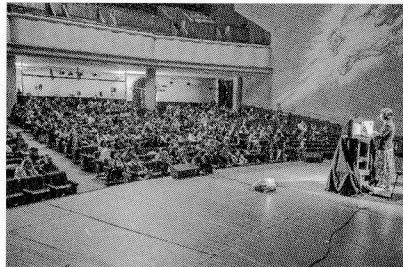
この講座二日目には、作家の早乙女勝元さんを講師にお迎えしました。十二歳のとき東京大空襲を経験した早乙女さんは作家として、語り部として、未来を担う世代に平和を訴えつつ生きてきました。今回のテーマも、「平和を探して生きる―ある作家の体験から―」です。



演じ方の連続講座で
(中央は筆者)



平和の大切さを伝える
講師の早乙女勝元さん



メキシコの会場で紙芝居を
伝える道山由美さん

東京大空襲は、広島原爆に匹敵するほどの人命被害があった空襲でしたが、五十年近くまえに早乙女さんが「東京空襲を記録する会」を結成するまで、記録はあまりなく、「闇に閉ざされていた出来事」だったと言います。歴史学者家永三郎先生との出会いに後押しされて始まった活動は、大勢の方の体験を集めた『東京大空襲・戦災誌』全五巻をはじめとする出版物に実りました。さらに「東京大空襲・戦災資料センター」を民立民営で開館し、昨年まで十七年間館長を務めてこられました。

講演は、なぜ突き動かされるように、東京空襲を伝えようとしてきたか、早乙女さんの生き方と思想を、静かな語り口で伝えるものでした。人の命を軽く見る日本の政治の在り方は、戦後も戦後も変わっていない。国民主権の憲法を持つ今でも、戦争を起こした政府側から、空襲についてなんの謝罪も補償もない。国の責任を問うための市民運動を継続される意味が、はっきりとわかりました。

早乙女さんは数々の映画や、コスタリカを取材したドキュメンタリー『軍隊をすてた国』の製作などでも知られ、軍事力に頼っていたら世

界は駄目になると伝えつづけています。百冊以上ある著者のなかには、『猫は生きている』（理論社）、「東京が燃えた日」（岩波ジュニア新書）をはじめ、子どもたちに向けた作品がたくさんあります。

「ささやかな小さな勇気がいい。その勇気をみんなが毎日、大事にして、そしてできることを一つずつ、諦めずに積み重ねてゆくことによつてしか、後の世代の平和は保証されないだろうと思います。」そんな大人と子どもの両方に向けた言葉で、お話を締めくくられました。

来春、童心社から出版される紙芝居『三月十日のやくそく』を、私たちは心待ちにしています。

二日間の講座について

早乙女さんのお話のあと、講座一日目は「すでに演じようQ&A」のプログラムです。用意された五つの質問に、二人組になった運営委員が、寸劇や実演も交えながら答えました。私は「立つ位置はどこがいいの？」を近藤洋子さんと二人で担当。笑いに心を解きほぐしながら、学んでいく時間でした。

講座二日目の午前中は、A「紙芝居の基本と歴史」、B「プログラムの立て方」、C「紙芝居で平和を」の三つのセミナーに分かれました。

午後は、参加者の方の実演を運営委員が講評する人気のコーナーで、抽選で選ばれた演じ手七名が登場。『チンパンジーのおんがくかい』『ぬすびととこひつじ』などに挑戦しました。今回、恵泉女学園大学の教授と学生の皆さんの参加があり、セミナーでも全体会でも、若い人たちが積極的に演じてくださったことが印象に残っています。

海外からの参加も六名ありました。アメリカの片岡さん、オーストラリアのブラウンさん、中国のジャンさん、ドイツのフランチェスカさん、ベトナムのフォンさん、ネパールのビダリさんです。フォンさんとブラウンさんは留学中の研究者で、平和紙芝居に強い関心を持っていました。

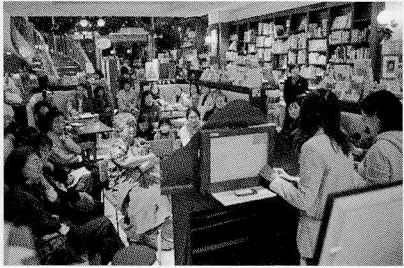
二日間にわたる講座は、二〇二〇年九月二十七日に、仙台で次の紙芝居講座を行うことをお知らせして、無事終了しました。

国際的な信頼のなかで

二〇一九年は、運営委員が、これまで以上に海外へ飛躍した年でもありました。スロベニアの「紙芝居ワークショップ」(四月)、インド・韓国の紙芝居セミナー(三月と五月)、中国の「IBYAアジア・オセアニア地域大会」(八月)、ペルーの「デハメ・ケ・テ・クエンテ(お話をさせて)国際フェスティバル(九月)、メキシコの「第一回紙芝居・口承文化国際会議」(十一月)、そして国際交流基金の助成を受けたフランス・ベルギー・オランダでの「紙芝居文化の会 欧州デモンストレーション・ワークショップ」(十一月)―九名のメンバーが、こうした場に向かい、講座や実演を行ったのです。パリの日本文化会館で十一月二十一日に開催された「紙芝居 学びの日」シンポジウムでは、学校教育、言語学習、出版・芸術表現、図書館の四つの領域での紙芝居の役割について発表がありました。移民や難民の受け入れに配慮を続ける欧州独自の取り組みが印象的でした。一方中南米の方たちは紙芝居そのものへの愛が深く、例えばメキシコでは、マリア・テレサさんとマリア・フェさんが喜びと熱意をもって紙芝居の種を育てています。ペルーの主催者クチャさん



リヨンの図書館で、
司書のミリヤムさんと



ブックハウスカフェでの世界
KAMISHIBAIの日



同日、マレーシアの海外会員が
子どもたちを集めて

は、「紙芝居は」世界を変えていくことは可能なのだを確信させてくれるもの」だと、紙芝居文化の会会報の「海外報告」(第三十五号・六月発行*)に寄稿しています。そんな言葉により、私たちは勇気もらい、また前に進めるのです。

紙芝居文化の会創立日の十二月七日には、昨年「世界KAMISHIBAIの日」(World Kamishibai Day)を東京で主催。「世界の言葉で紙芝居を」ではトルコ語、韓国語、モンゴル語、スペイン語、オランダ語での紙芝居実演があり、「紙芝居で世界をめぐる」は世界のお話を有志グループ「バッパー7」が次々と演じてみせました。「紙芝居にチャレンジ」は飛び入り歓迎コーナーで、創作講座で作った紙芝居を披露する方もいました。

新しい試みとして、マレーシアの図書館と日本をつなぐ紙芝居中継もありました。マレーシア語で演じる『みんなでぼん!』に、現地の子どもたちと日本の参加者が一緒にぼん!と手を打ったとき、私たちの心と世界が一つになったように感じました。

「紙芝居で平和のひかりを」は、永瀬比奈さんの英語による『のぼら』と、松井エイコさん

& フォンさんの日本語+ベトナム語による『太陽はどこからでるの』の実演でした。紙芝居について論文をまとめたフォンさんは、「ベトナムで紙芝居文化を広めたい」という強い決意のもと帰国し、現地で新しく活動を始めています。会場のブックハウスカフェには立ち見を含めてのべ八十名以上が参加。国内からは十の都道府県、十五か所での実演報告が、海外からは二十二の国と地域、百四十か所からの報告が届いているそうです**。

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、私たちの会も活動に制約を受けています。人と人が集まるなかで、「文化」は初めて生まれるものだと痛感しています。そんななか、小さな試みとして、「おうちで紙芝居」キャンペーンを始めました。紙芝居の共感の喜びは、自分以外の大事なものかもうひとりいれば、そこから始まるのです。皆さんも、今こそ紙芝居を演じてみませんか？

連絡先：紙芝居文化の会事務局

TEL 0422-49-8990

(mail) kamishibai@ydb.ne.jp

(website) <https://www.kamishibai-ikaja.com/>

(Facebook) <https://www.facebook.com/IKAJA.kamishibai/>

* 同じ号に、早乙女勝元さんの講演と昨年の講座報告の詳細もあります

** <https://www.kamishibai-ikaja.com/activities/World-Kamishibai-Day-2019.html> 34